

## 言語学者はなぜ「対称性」に興味を示さないのか？

坂本 勉

Although “symmetry in language” may be related to the origin of the language, many linguists do not seem to show interest in this problem. Why do linguists not show interest in symmetry? There seem to be at least three reasons. ① Concerning “reference”, there have been many disputes in the philosophy of language. Nowadays, more complex problems than symmetry attract researchers in the field of semantics. ② Saussure pointed out that the system of language does not concern the symmetry between “thing and name”. ③ For linguists, a more important research theme is the elucidation of the relationships between the elements inside the language structure.

Keywords: symmetry (対称性), reference (指示), linguistics (言語学), relationship (関係性)

### 1. はじめに

前回 (Vol.15, No.3) の特集に収められた多くの論文において、様々な文脈で「言語における対称性」が語られている。例えば、今井・岡田論文の冒頭では、「私たちヒトは一つ一つのことが、... (中略) ...特定の対象の『名前』であるという強い直感を持っている」と述べられている。この直感は、言語における「対称性」という観点から説明される。服部・山崎論文では「リング (実物) がりんご (名前) と呼ばれ、『りんご』と呼ばれるものがリングであるなら、対称性が成立していることになる」と論じられている。人間の子供がこの対称性を教えられることもなくやすやすと習得するのに対し、人間に最も近い種であるチンパンジーですらかなりの訓練を必要とするらしい。対称性の理解が人間に特有のものであるということから、Oaksford 論文は対称性が言語の起源に関わっていると主張する。これに対し、動物でも訓練すればある程度は対称性の概念を獲得できるということから、Sidman 論文は対称性そのものは言語の起源とは直接関係ないと述べている。ただし、武藤・ヘイズ論文が言うように、「現時

点では『対称性が先なのか、言語が先なのか』という問題の解決には至っていない」ということのである。

このように、言語の起源にかかわる大問題につながるかもしれないのに、多くの言語学者は対称性の問題に興味を示さないように見える。「(実) 物」と「名 (前)」との間に対称性が成立しているかどうかをめぐる問題は、現在の言語学にとっては主要な研究テーマとはなっていない。この無関心さは、発達心理学や社会心理学、動物行動学、情報工学、認知科学など多くの他分野の研究者の目には奇妙に映ることであろう。言語学者はなぜ対称性に興味を示さないのだろうか？ もちろん、全く興味がない訳ではないのだろうが、少なくとも、対称性に関する前回の特集に言語学者からの投稿はなかった。その理由は様々であろう。もちろん筆者は全ての言語学者の代表ではないので、その理由の全てを説明することは不可能であるが、私見によれば、少なくとも3つの理由が考えられる。①いわゆる「語」が何かを「指す」という「指示」の問題は、古くから哲学の扱うテーマであり、言語哲学 (分析哲学) において多くの論争があった。その結果を受け、「意味論」の分野では、対称性よりも複雑で重要であると思われる問題を扱っている。②ソシュール (Saussure,

1916)の革命的な言語論によって、言語研究においては物と名との間の対称性を問うことは無意味であることが示された。③言語学にとって重要な研究テーマのひとつは、言語構造内部における要素間の「関係性」の解明である。これは、語と語の関係を考察する「統語論」において考察が行われている。そこで、本稿では、具体的に何かを指し示すのではなく、語と語との「関係」のみを示す機能を担う言語的要素として、格助詞の「が」をめぐる問題を取り上げ、言語学者が興味を持っていることの一端を示してみる。

## 2. 語が指し示すものについて

物と名との関係については、古くから考察の対象であった。旧約聖書では、アダムがこの世の様々なものに命名を行ったとされている。新約聖書には、かの有名な「初めに言葉(λόγος)ありき、言葉は神と共にありき、言葉は神であった(ヨハネによる福音書第1章1節)」という記述がある。言葉は神によって与えられたとする神授説にとって、物に付与された名は唯一無二のものであった。一方、(時代も地域も異なるが)プラトン(1974)は、『クラテュロス―名前の正しさについて』という論述において、「名称とそれが指し示す事物との間には自然な関係がある」というクラテュロスと、「事物の命名は単に社会的な約束事にすぎない」というヘルモゲネスの意見を戦わせている。プラトン自身は、クラテュロスの立場をとっているが、ヘルモゲネスの視点を導入したことは特筆に価する。しかし、プラトンは「物」に付けられた「名」が正しいかどうかを問題にしたのであり、物に名が付いていること自体は当然のことと見なしている。

語とそれが指し示すもの(すなわち、「指示対象(referent)」)との間の対称性を考えるということは、言語と世界との間の関係を考えるということである。フレーゲ(Frege, 1892)は、有名な「宵の明星」と「明けの明星」についての議論で、両者の意味(Bedeutung)は同一であるが、それらの表現の意義(Sinn)は同一ではないと主張した。「宵の明星」と「明けの明星」の「意味」は、その指示対象としての金星である。しかし、その「意義」はそれぞれ、夕暮れと明け方に見られる星であり、異なるものだというのである。ここでは、「指示の同一性」とは何かという問題が提示されている。ま

た、ラッセル(Russell, 1905)の確定記述(definite description)は「指示対象の存在」の問題を扱うものである。「現在のフランス王は禿頭である」という例では、現時点でフランス王が存在しないので真とも偽ともいえないように思われる。しかし、この命題を「Xがフランス王であり、かつXが禿頭である、そのようなXが存在し、しかもただ一人存在する」という諸命題の連言として解釈することによって、真偽を問うことができるとした。さらに、クワイン(Quine, 1960)の「ガヴァガイ問題」は語が何を指示しているかは一義的に定まりえないとする「指示の不可測性」を示している。ある未知の言語を話す現地人が、畑の隅からウサギが飛び出てきたとき、「ガヴァガイ」と言ったとしよう。しかし、「ガヴァガイ」が「ウサギ」と一対一の対応をなすのか、「ウサギの耳」を指すのか、「ウサギが走る」や「ウサギを捕まえろ」などの文なのか、この状況では全く特定できないのである。

このように、現代の言語哲学において考察されてきた指示の問題は、言語と言語体系外の实在との関係が非常に複雑であることを示している。さらに、語のレベルを超えて、「文」の指示対象を考えた時、問題はさらに複雑になってくる。フレーゲやラッセルに源流を持つ「形式意味論」では、文の指示対象はその文が真になる条件(真理条件)であるとする。さらに、可能や条件などにかかわる表現を扱うために、この考えは「可能世界意味論」に拡張され、論理的に可能な状況全体の中でその文が真になるものの集合が文の指示対象とされる。文の指示対象を決定するのが可能世界における真理値の問題だということになると、「現実世界の物」と「人間言語の語」との間に一対一の対称性が成立しているかどうかという問題との関連性はなかなか見えなくなってくる。意味論学者は、物と名との間の単純な対称性の問題には、もはや興味を示さないのではないかと思われる。意味論は「状況意味論」や「認知意味論」など多様な展開を見せているので、もちろん、全ての意味論学者がこの私見に賛成することはないであろう。大いにご批判いただきたいところである。

## 3. 体系としての言語

「物には名(ラベル)が付いている」という我々の直感を真っ向から否定してみせたのがソシュールである。彼は言う「ある人々にとって、言語とは、要

するにひとつの用語集, すなわち, それぞれの物事に対応する用語 (termes) のリストに過ぎない。しかし, この考えは多くの点で批判されるべきである」と。言語は物に付けられた名前のリストではないという彼の主張を理解するためには, いくつかの前提となる概念を理解しなければならない。まず, ソシユールは, 多様で混質的な「言語活動 (langage)」が2つのものから成っているとした。ひとつは, それ自体でひとつの統一体をなす「言語 (langue)」で, それは言語能力 (faculté du langage) の社会的産物であり, その能力を個々人が行使できるように社会全体が採用した契約 (conventions) の総体である。もうひとつは, その言語能力の行使, すなわち具体的な発話 (parole) であり, 適切な語を選択して組み合わせ, 自らが意図した事柄を実際に口 (や手など) を使って言葉を発する個人的行為である。人間の言語活動は, 社会的側面である「言語」と個人的側面である「発話」とに二分される。ここで, 言語学の主たる研究対象は体系としての言語であって, 発話の研究は副次的なものであるとソシユールは主張した。

さて, このように言語の社会的側面に注目すると, 言語とは常に前の世代から受け継いだものでしかありえない。よって, 言語の起源の問題は重要ではない。なぜならば, どんなに古い時代の言語であっても, それは前の世代からの継承物なのである。起源の問題はどんなに遡ってもきりがないので, 「それは提起すべき問題ですらない (Ce n'est pas même une question à poser)」とソシユールは言う。言語学の真の研究対象は, 今現在目の前にある言語に内在する体系そのもののなのである。有名な話であるが, 1866年のバリ言語学会では, 言語の起源についての発表が禁止された。ただしこれは, 言語の系統発生的な (あるいは, 社会的な) 起源の問題であり, 言語の個体発生的な起源の問題とは別である。では, 子供はどのように言語を獲得するのであるのか? それは, 「学習 (apprentissage)」であるとソシユールは述べている。では, 何を学習するのであるのか? ここではやはり, 「物」と「名」の対称性を学ぶのであろうか?

さて, 目の前にある赤いリングも八百屋の店頭に置いてある青いリングも, そして, 昨日食べたリングも, 明日買うかもしれないリングも, 皆「リング」である。もし, 語が何かを指し示すとすれ

ば, それは物ではなく, 「概念 (concept)」である。概念とは, 具体的な個々の事物, 行為, 性質, 状態などから, その特殊性を捨象し, 普遍性を抽象したものである。しかし, 語によって名づけられる以前に概念が存在しているわけではない。また, 概念に先立って語が存在するのでもない。両者の間には, 恣意的な結びつきがあるのみであるとソシユールは述べている。語とは記号 (signe) であり, 「記号するもの (signifiant)」(能記) と「記号されるもの (signifié)」(所記) とが勝手に結びついているだけである。要するに, 「語」とは「音素列」と「概念」とが恣意的に結びついたものであるということになる<sup>1)</sup>。よって, 『りんご』という語は /ringo/ という音素列 (signifiant) と「林檎」という概念 (signifié) が結びついたものであって, 決して実物の「リンゴ」と結びついたものではない。実物のリンゴが赤かろうが青かろうが, 甘かろうが酸っぱかろうが, 『りんご』という語には一切関係ないことである。現実世界の物理的特性は社会的な契約の体系としての言語とは何のかかわりも持たない。

では, 実物の「リンゴ」と何の関係もない『りんご』はどのようにして『りんご』たりうるのであろうか? 『りんご』は『みかん』ではないことによって『りんご』なのである。そして, 『みかん』は『りんご』ではないことによって『みかん』なのである。つまり, A は B ではないことによってのみ A たりうる。さらに言えば, A は A ではないもの全てと異なっている, あるいは, 対立していることによって A なのである。よって, /ringo/ という音素列は, /rigo/ や /gonri/ でも構わないし, /pekyon/ であってもよい。どんな音素列であっても何の問題もない。それが, /mikan/ や /momo/ や /banana/... などであれば, それは音素列ですらなくてもよい。そう, 文字でもよいし, 手話のように手の動きや顔の表情などでも構わない。もちろん, 言語を表出するための「手段」は何らかの物理的実体を必要とするが, 言語そのものは実体ではない。ソシユールのチェスの喩えて言えば, 駒の材質が象牙であろうが木や紙でできていようが関係ない。それぞれの駒があるルールに則って一定の動きをするということが大切なので

1) ここで言う「音素列」は, 実際の具体的・物理的音声のことではなく, 抽象的・心理的な要素である。ソシユールは, 聴覚映像 (image acoustique) と呼んでいる。具体的な音を [a], 抽象的な音素を /a/ と表記する。こうした音素の集まりが, 「音素列」である。

ある。言語においても同様である。つまり、言語とは差異の体系である。言語を獲得するということは、この体系を学ぶことであって、個々の語を個別に学習することではない。しかし、この体系を学ぶためには個々の語を学習するしかない。そうすると、ひとつひとつの語を学習することが言語を獲得することのように思えるが、そうではない。何の脈絡も体系もない「語のリスト」を覚えても言語を獲得したことにはならない。受験生が英単語をアルファベット順に暗記していても、決して英語そのものを獲得したことにはならないのと同じである。/ringo/は、/ringu/（リング）や/rongo/（論語）などと音素列としては類似しているが概念は異なっており、「林檎」という概念は「蜜柑」や「桃」などと類似しているが音素列は異なっているということを学習しなければならない。すなわち、語の音素列と概念のネットワーク（体系）を学ぶことによって言語を獲得するのである。ある音素列 (signifiant) と概念 (signifié) との結びつきは恣意的であるということは、その結びつきは必然的なものではなく、社会的・慣習的に（勝手に）決定されているということである。しかし、ひとたびその結びつきが決定し承認されると、個人にとっては「必然的」なものとなってしまう。体系としての言語はその言語を学習する個人には絶対的な強制力を持つ（坂本, 2005 を参照）。そこで我々は、物と名との結びつきが必然的なもの、すなわち、そこに対称性が成立しているかのように錯覚してしまうのである。

ソシュールの著書は、彼の死後、二人の弟子によって、受講生のノートを元に、いくつかの資料を組み合わせで編集出版された。編者たちはこの講義には出席していない。こうした出版の経緯もあって、この本の記述は曖昧で首尾一貫していないところもある。さらに、広く流布している日本語訳は、今となつては読みにくい文体であり、誤訳も見られる<sup>2)</sup>。そのようなことから、ソシュールは『りんご』という語は恣意的に「リング」という物に結びついていると主張したのだと誤解している人も多い。もしそうならば、これはプラトンのヘルモゲネスの意見と同じであって、何も新しいことではないし、ソシュールが現代言語学の開祖と呼ばれるほどのコペルニクス的発想の転換を示したことにはならない。彼の言語の中には、物は一切登場しない。現実世界

の物とは無関係に、言語は言語の体系の中だけで充足し、完結する。音素列と概念とが恣意的に結びついた語は他の語との関係性においてのみ体系の中に位置づけられ、価値を持つ。次の節では、そうした「関係性」に関わる問題の一例を簡単に紹介する。

#### 4. ガ格連続文の解釈

前節では、言語とは単なる物の名のリストではなく、要素間の関係のネットワークによって成立していると述べた。その関係性とは、統合関係 (syntagmatique) と連合関係 (associatif) という2つの側面に集約されるとソシュールは主張する。前者は、時間軸に沿って、前後の要素を統合して構成される関係で、後者は記憶の中において想起される、種々の共通性または、類似性に基づいていくつかのグループを作るものである。次の文を見てみよう。

(1) 私は            きのう            学校に            行った。  
     {あなた}   {おととい}   {家}   {戻った}  
     {彼}        {昨年}        {大阪}   {出張した}

(1) において、「私は」「きのう」「学校に」「行った」という4つの要素は、このように並べられることによって統合関係を構成し、あるひとつの文を作り上げている。一方、「私」という語は、「あなた」や「彼」という他の語と連合関係にあり、「人称代名詞」というグループを形成する。このグループの語であれば、この文の文頭の位置に出現することが可能である。すなわち、そうした語は「潜在的に」存在していると言えるのである。「きのう」という語は「おととい」や「昨年」などと共に「時の副詞」という語のグループを作る。以下、同様である。

この節では、要素間の統合関係の一例として、格助詞の「が」が連続して出現した時に、2つのガ格名詞句がどのような関係となるのかを少し考察してみたい。例えば、「太郎が花子が」のようにガ格名詞句が連続して出現しているが、まだ文末の述語が出現していない段階で、この2つのガ格名詞句はどのような関係にあると考えられるであろうか。この時、この2つのガ格名詞句は別々の文を構成する要素であろうか。すなわち、下の(2)のように、第2ガ格名詞句から新たに別の節が始まる複文構造を成すのであろうか。それとも、(3)のように、2つのガ格名詞句がひとつの節を成す単文構造なのであろうか。

2) 読みやすく、信頼のおける解説書としては、丸山 (1983) がある。

- (2) [太郎が [花子が 笑った] と言った].  
 (3) [太郎が 花子が 好きだ].

(2) では第2 ガ格名詞句は埋め込み文の主語であり、自動詞 (笑った) が埋め込み文の述語となっている。一方、(3) においては、第2 ガ格名詞句は主文の目的語であり、状態述語 (好きだ) が後続している。ここでは、「太郎」や「花子」が実際にどういう人物を指し示しているのかは問題ではない、また「が」が何か具体的な物を指し示しているということもない。問題は、「太郎が」と「花子が」がどのような構造上の位置関係にあるのかということである。(2) ではこの2つの名詞句は別々の文に属するが、一方、(3) では、この2つは同一の文の内部にある。このことを図示してみよう。

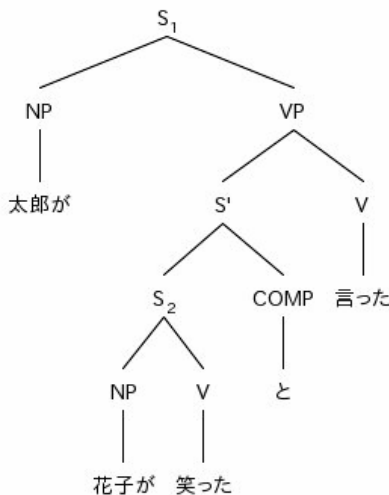


図1 「太郎が花子が笑ったと言った」の樹形図

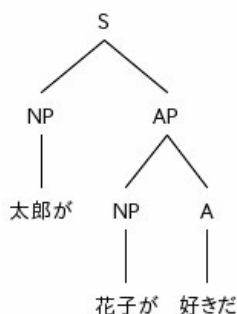


図2 「太郎が花子が好きだ」の樹形図

ここで言語学者が問題にしようとするのは、(2) のように文の中に別の文が埋め込まれた構造 (これを「中央埋め込み文」と呼ぶ) とはどのようなものであるのかを明らかにすることであり、(3) のような「ガ格目的語」を持つ構文の性質を解明することである。そしてさらには、こうした文を我々がどのように理解 (解釈) しているのかを明らかにしようとするのである<sup>3)</sup>。格助詞は、単独では自立して存在することはできず、必ず語や句などに付加されなければならない要素である。こうした要素が指示する対象物が外界に存在するか否かを問うことはあまり意味があることとは思えない。ましてや、それが固有名詞か確定記述か、または、全体か一部かなどと議論しても無意味であろう。これらの要素は、言語体系の中において、要素間の関係性を示すためにのみ用いられるのであり、その関係性の解明は言語研究にとって重要な問題のひとつなのである。

## 5. おわりに

本稿では、言語学者がなぜ対称性の問題に興味を示さない (ように見える) のかを、3つの観点から論じてきた。まず、物と名との間に一対一の対応が成立しているかどうかという問題に関しては、哲学の分野での長い論争の結果を受け、意味論ではより複雑な問題を扱うようになってる。次に、ソシュール以降、言語学が真の学問として成立するためには、他の一切のものから切り離され、自律した体系としての言語を研究対象とすべきであるという考えが支配的となった。そこで、言語学の研究対象となったのが、要素間の関係の解明を目指す統語論であった。その一例として、ガ格名詞句の問題を簡単に紹介した。

もちろん、言語研究が大きく進展した現在は、ソシュールの時代とは事情が異なっている。周知のように、チョムスキー (Chomsky, 1957) の生成文法以降、言語を産み出す装置そのもの (すなわち、我々人間の心・脳 (mind/brain)) が言語学の研究対象のひとつとなった。産み出されてしまったものは千差万別・多種多様であるから、それら全てを研究の対象にすることなど不可能である。言語をいくらたくさん集めても「言語とは何か?」は分からない。何が言語を産み出しているのかを問わねばな

3) 坂本・吉長 (2006) では、心理言語学的な実験に基づいて、ガ格連続文が実時間 (オンライン) でどのように解釈されていくのかを検討している。

らない。「生み出された結果」のみならず、「生み出す装置」へと言語研究の方向が広がった。最近、チンパンジー（ボノボ）の言語学習の研究や鳥類・鯨類などの鳴き声の研究、また、考古学・脳科学の進展などによって、言語の系統発生に関する研究も進んできた。Burling (2005) の *The Talking Ape: How Language Evolved* (言葉を使うサルー言語の起源と進化) という刺激的な本も出版されている。子供の言語獲得に関しては、今や膨大な研究の積み重ねがある。「動物の言語」と「子供の言語」の研究によって明らかになってきたことがある。こうした研究を通じて、やがては対称性と言語の起源の問題などが明らかにされるのかもしれない。しかし、ここで銘記すべきは、物と名との間に一対一の対称性が成立しているというナイーヴな考えは錯覚にすぎないということである。このことは、ソシュールの言語論や一連の言語哲学的論考の結果、既に自明のことであると言語学では思われている。この錯覚から抜け出さない限り、言語の本質も起源も解明できないと言語学者は考えている。よって、現代の言語学者は単純な対称性の問題には興味を示さないのであろうと思われる。

本稿で述べた私見に対して、言語学者はもちろんのこと、他分野の方々からのご批判・ご意見を頂ければ幸いである。

## 謝 辞

本論文における論考の一部は、平成 20 年度科学研究費補助金（基盤研究 (B)、課題番号 20320061）の補助を受けています。2 名の匿名閲読者からは貴重なコメントを頂きました。また、本論文には、多くの方々と議論の結果が反映されています。ここに記して感謝の意を表します。もちろん、不備・不明の点は全て著者の責任です。

## 文 献

Burling, R. (2005). *The talking ape: How language evolved*. Oxford: Oxford University Press. (松浦 俊輔 訳 (2007). 『言葉を使うサルー言語の起源と進化』。東京：青土社。)

- Chomsky, N. (1957). *Syntactic structures*. The Hague: Mouton.
- Frege, G. (1892). *Über Sinn und Bedeutung*. In H. Feigl & W. Sellars (1949) *Readings in philosophical analysis*, 85–102. New York: Appleton-Century-Crofts.
- 丸山 圭三郎 (1983). 『ソシュールを読む』。東京：岩波書店。
- プラトン (1974). 『プラトン全集〈2〉クラテュロス・テアイテトス』。(水地 宗明・田中 美知太郎訳)。東京：岩波書店。
- Quine, W. (1960). *Word and object*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Russell, B. (1905). *On denoting*. In H. Feigl & W. Sellars (1949) *Readings in philosophical analysis*, 103–115. New York: Appleton-Century-Crofts.
- 坂本 勉 (2005). 擬人法または擬物法 — あるいはラングとパロールの相剋 —。『文学研究』, 102, 1–20. 九州大学人文科学研究院 編。
- 坂本 勉・吉長 美佳 (2006). 日本語における「ガ格連続文」の処理について。『九州大学言語学論集』, 27, 1–36. 九州大学人文科学研究院言語学研究室 編。
- Saussure, F. (1916). *Cours de linguistique générale*. Paris: Payot. (小林 英夫 訳 (1949/1972 改訂版)。『一般言語学講義』(改訂版)。東京：岩波書店。)

(Received 11 Nov. 2008)

(Accepted 6 Jan. 2009)



坂本 勉 (正会員)

1984 年京都大学文学研究科博士後期課程（言語学専攻）満期退学。1991 年ニューヨーク市立大学 (CUNY) 大学院博士課程（言語学専攻）修了 (Ph.D.)。現在、九州大学人文科学研究院言語学講座教授。

専門は心理言語学、特に、実験手法を用いた日本語の文理解の研究。また、認知言語学的な観点から、比喩論にも興味を持っている。日本認知科学会、日本言語学会、日本心理学会などの会員。